
Magic Soldiers

扇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M a g i c S o l d i e r s

【Nコード】

N 4 3 1 8 B

【作者名】

扇

【あらすじ】

現実上、絶対に存在しない魔法。その魔法の世界に足を踏み入れた少年、シエルの一生を辿る。

1章：魔の訪れ

5歳の誕生日を迎えた幼稚園児。その名はシエル。

シエルは家族や友達からたくさんのお祝福を受けていて、とても嬉しそうだった。

シエルはある一人の友達からサッカーボールをプレゼントされた。シエルは大喜びした。

シエルはサッカーが大好きで、幼稚園でもいつも友達とサッカーをして遊んでいた。

この他にも、シエルは様々な物をプレゼントされて、ものすごく嬉しがっていた。

こうして、一年に一日しか来ないシエルの誕生日は過ぎた。

翌日、シエルは朝早くプレゼントされたサッカーボールを持って公園へと足を運んだ。

公園にあるボール当ての的を目掛けてシュート練習をしていた。

「将来はサッカーW杯に出場出来たらいいな」

と心の中で思いながらひたすらボールを蹴り続けていた。

その時、南から強い風が吹いた。その風に、何やら違和感を感じた。

「何か体がおかしい。」

シエルはそう思いながら家に帰り、幼稚園へ行く準備をした。

幼稚園から帰ってきたシエルは、指で銃の形を作り、部屋内に飾ってある人形に射撃するふりをした。

すると驚くことに、銃の形を作った指先から火の粉が物凄い勢い

で飛び放った。

シエルは驚きを隠せなかった。

「一体何だ？」

シエルは恐くなって布団に包まって怯えだした。

次の日の夜には、家にある竹箒を空中に放り投げたら、なんと竹箒が空中に浮いた。

シエルは、シエルの身の回りに立て続け起こる怪奇現象からふと思った。

シエルはなにやら不思議な魔法の様な力を身に付けたみたいだと。

2章：舞い踊る水

不思議な力を手に入れてから早五年。シエルは相変わらず起こる魔法の様な力に悩まされていた。

しかし、常時起こる現象に驚く反面、このような力を手にしたおかげで現実上の不可能を可能にできるようになった。

例えば、触れたものを自由自在に操る魔法や、指から火の粉や水を出すなど、とにかくすごい技を手に入れた。

シエルは今、十歳になった小学生。もう他の小学生とは全然違う。もはやシエルは魔法使いといえる。もうシエルは普通の人間ではない。

まるで神様がシエルの体にいたずらしたみたいだ。一生魔法使いとして人生を歩むことになる不安が募るが、その分他人は絶対に真似する事が出来ない力を授かったとなると、ものすごくいい事だ。

シエルはいつも通り学校へ行った。

学校に着くと、シエルは普通に授業を受け、休み時間には友達とサッカーをしたりと、ごく普通の小学生を演じていた。

学校が終わり、シエルは帰るため学校を出た。

その途中、シエルは火事現場を見かけた。ふと見てみると残酷なことに普通の家が赤い炎で包まれていた。

消防車が数台来て消火作業をしているが、火が消える気配は全くない。

そこでシエルは火事現場の近くを流れる大きな川の岸边に行き、川の水に触れた。

そして、シエルは川に向かってこう言った。

「水よ！水柱を落とせ！」

そう言っていると、川の水は、炎上し続ける家に、滝のように降り掛かった。

近くにいた消防士や、通りすぎる一般人は啞然とした。もはや、この魔か不思議な光景を目の当たりにして、平然としていられた者は、誰一人いなかった。

しかも、この現象が小学生によるものだとは誰も考えなかった。

3回水柱を落とした末、炎で包まれていた家は、消火された。なんとか、全焼は免れた。

シエルは何もなかったかのような顔をして、家に帰った。

家に帰るとシエルは、おやつにメロンパンが出された。

しかし、シエルはメロンパンよりもシュークリームが食べたかったらしく、試しに指を鳴らしてみた。

すると驚くことに、おやつにメロンパンが一瞬でシュークリームに変わった。どうやらシエルは、欲しいものを、心で思うだけで身の回りにあるものと取り替えられる秘技を身に付けた。

3章：暴れる炎

強い日差しが照りつく真夏日。

シエルは15歳になった中学3年生。

今日は、シエルにとって中学校最後の総体。シエルはサッカー部の代表として緑のフィールドに足を運んだ。

そして、いくつ秒読みが刻まれ、試合開始のホイッスルが鳴った。

試合は白熱した展開を迎え、同点のまま前半、後半が終了し、試合はPK戦で勝敗を決めることに。

そして、シエルがシュートをする順番が来た。

このシュートが決まるかどうかで、勝敗が決まる。つまり、シエルがシュートを決めれば二回戦進出。外せば、シエル達3年生は引退。

シエルには、物凄いプレッシャーがかかっていた。シエルは深呼吸して、ボールを蹴った。

シエルが蹴ったボールは、相手キーパーの読んだ方向と逆方向に蹴った。

しかし、ボールはゴールには入らず、外してしまった。

この瞬間、シエル達の引退が決まった。

シエルは、その場で倒れこみ、泣き崩れた。

こうして、シエルの中学校でのサッカー人生は幕を閉じた。

数週間後、シエルは自分の部屋で受験勉強をしている真つ最中だった。

身の回りにあるものを、変えたい物に変えられる力を手に入れてから、シエルは変えたい放題変えていた。例えば、ボロボロのサッカーボールを新品のサッカーボールに変えたり、古くなった椅子を

座り心地の良い椅子に変えたりしていた。

月日は流れ、9カ月後。

進路も決まり、無事卒業することが出来たシエルは使える魔法を使いながら、遊んでいた。

ある時、日が暮れてきたのでシエルはジュースを買って家に帰ろうとした。

帰る途中、シエルの前方から人が悪そうな大人が5、6人ぐらいが固まってシエルとすれ違った。

すると、運が悪いことに、大人たちに声を掛けられてしまった。「ちよつと来い」

そう言われるとシエルは人の気配がない路地裏に連れ出されてしまった。

「金出せっ！」

シエルは大人たちに恐喝されてしまった。

シエルは

「イヤだ！」

と勇ましく断った。

次の瞬間、大人たちは一斉にシエルに殴り掛かった。

しかし、今のシエルには絶対に勝てるわけがなかった。

まずシエルは、襲ってくる大人たちに対して、指で銃の形を作り、「バン」

と口ずさんだ。

次の瞬間、シエルの指から勢い良く出た火の粉が数発大人たちに放たれた。乱射された火の粉が大人たちの服を徐々に燃やしはじ

めた。

大人たちは、自力で火を消し、恐い顔をしながら逃げていった。シエルは、ポケットに手を入れながら路地裏を後にして、こう呟いた。

「愚かな連中だぜ。」

こうして、シエルは何もなかったかの様にして家に帰った。家に帰ったシエルは自分にこう言った。

「この魔法の力があれば恐れることなんか何もない。」

そういつてシエルは家に帰り、まだ自分に隠された力が存在するのではないかと思い、あらゆる動作を行なった。

一週間後、新しく魔珂不思議な力を発見した。

それは、写真や絵本に写っている様々な物を現実に出現させるという力だった。

しかも、生き物には、生命やキャラクターとしての魂までもが、自動的に宿ってるとのこと。

これは、いわばまさに、『召喚魔法』と名付けるべき力だった。

さらに一週間後、シエルはまた新しい力を手に入れた。

物や人。さらには人以外の生き物を他の送りたい場所へ瞬間移動させる力だった。

シエルは、もはや人間ではなく、魔法使いとして生きていくだろう。

4章：脱獄した悪魔

不思議な力を手に入れてから、もう15年の時が経った。

シエルはもう二十歳。立派な成人になった。

シエルは今、地方の大学に通っているため、実家から仕送りをしてもらいながら、アパートで一人暮らしをしている。

普段は、大学から帰ってきたら、夕方までバイトをしている。

その後、午後の9時ぐらいから深夜0時ぐらいまで、復習を含む猛勉強をしている。

シエルの大学生活は、かなり過酷なスケジュールの毎日だった。

ある休みの日の朝、シエルは朝食を摂りながらテレビのニュースをみていた。すると、驚くべきニュースが報道された。

「たった今、入ったニュースです。

先月起こった連続殺人事件の黒幕、『D・ブラウン』が刑務所より脱獄しました。

警察では行方を追っている所です。」

シエルは啞然とした。

あの凶悪犯が脱獄囚へとなってしまった。

身仕度を終え、シエルは自宅を後にし、学校へ向かった。

大学に着き、元気そうな顔をしながら教室に入った。

すると、クラスメート達の口からは、今朝のニュースの話題が切り出された。

「今朝のニュース見たか、シエル？」

親しきクラスメートの中の一人、『サンド』がシエルに話し掛けた。
てきた。

「あの殺人鬼が脱獄したらしいな。もし見かけたら俺の手でとっ捕まえたいぜ！」

「お前じゃ、逆に瞬殺されるよ。」

シエルとサンドはお互いにジョークをかましながら楽しげに話していた。

数日後、シエルは大学から帰る途中、コンビニで買い物をしていった。
すると、サンドも同じ店内で買い物をしていた。

シエルはコーヒーを、サンドはオレンジジュースをそれぞれ買って店を出た。二人はゆったり寛ぎたいという気になり、近くの広い公園に向かって歩きだした。
すると、歩いてる途中に、二人と同じクラスメートの女子、『スタフィー』に偶然出くわした。

「こんにちは。いい天気だね！」

シエルが清々しく挨拶した。

しかし、スタフィーは怯えた顔をして走りながら通り過ぎていった。
た。

この態度に対して腹を立てたサンドは、スタフィーに向かって思いつき怒鳴った。

「せつかくシエルが話し掛けてくれてなのに、何だ！その態度は！

「？」

「ただどスタッフイーには、注意しても無駄だった。」

その後、シエルとサンドは公園でのんびりしたり、サンドの愚痴を聞いたりして帰った。

翌日、シエルは昨日、様子が変わったスタッフイーに何があったのか聞いた。

すると、スタッフイーの口から驚くべき事実を知らされた。

「実は昨日、脱獄した凶悪犯の『D・ブラウン』に会ってしまったの。」

シエルは驚きを隠せなかった。

話によるとブラウンは黒い大きなコートを着用していて、顔をフードで覆い隠していたらしい。

人のいない公園のベンチで休憩をしようとして、フードを取った所をスタッフイーが見てしまったらしい。シエルはやっと昨日のスタッフイーの変わった様子について納得した。

「わかったことは、ブラウンがまだシエルたちの近辺をうろついている可能性が高いということだった。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4318b/>

Magic Soldiers

2011年1月27日03時24分発行